

4月5日「何のために働くのか？」 I テモテ 4 : 6 ~ 16

新年度最初の礼拝を迎えました。毎年、この礼拝の日には、年度の年間聖句についてお話しています。昨年は「信仰・希望・愛」の「信仰」の年として年度聖句を選びました「**あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。（ガラテヤの信徒への手紙 3 : 26）**」この言葉の通り、信仰によって多くの人たちと結びあわされてきたことを意識させられ続けた1年であったように思います。まず、なんといっても創立130周年でした。記念礼拝やコンサートにはこれまでの繋がりから多くの方が集まってくださいました。また愛光保育園とは記念誌も一緒に発行できました。私にとって思い出深いのが、2019年度をもって、愛知県へ進学されたマレーシアからの留学生の方との出会いです。彼女は私たちの教会を「日本の家族」と呼んでくださいました。本当に嬉しかったです。これからも色々な方とキリスト・イエスによって結ばれた信仰共同体として共に歩んでいけるよう願っています。

そして、私たちは今日から 2020 年度を迎えます。主題は「希望」。聖書そのものが神と共に歩む希望について語った書だと言えそうですが、その中の数ある希望の言葉からテモテへの手紙 I からこんな聖句を選びました。

「わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人の救い主である生ける神に希望を置いているからです。」

この手紙は牧会書簡と言われています。テモテとは人の名前で、パウロの宣教旅行に同行した、とても親しい弟子であったようです。1章はこんな風に始まります。「わたしたちの救い主である神とわたしたちの希望であるキリスト・イエスによって任命され、キリスト・イエスの使徒となったパウロから、信仰によるまことの子テモテへ」パウロからテモテへと向けられた手紙の体裁をとっているのです。けれども、手紙の中身を見ると、どうもパウロが実際に書いた手紙とは内容や語句にズレがあるようで、研究者の間ではパウロより少し後の時代（2世紀）の教会指導者が、各地の牧会者たちを教え、励ますために書いた手紙だと考えられています。

この牧会書簡で繰り返し語られるのは、間違った教えや、作り話に心を奪われるのではなく、イエス・キリストが説かれた真実の言葉に耳を傾けるようにということです。

「4:1~3 終わりの時には、惑わす霊と、悪霊どもの教えとに心を奪われ、信仰から脱落する者がいます。このことは、偽りを語る者たちの偽善によって引き起こされるのです。彼らは自分の良心に焼き印を押されており、結婚を禁じたり、ある種の食物を断つことを命じたりします。」

どうやら、当時の教会には、作り話や系図の詮索によって噂話に熱心になる人たちがいました。中には、倫理的に墮落したり、キリストの復活を否定する者たちもいました。また、自分たちには特別に霊的な知識（グノーシス）が与えられていると誇る者たちもいました。さらには、律法の教えを過度に強調して裁きあったり、結婚の禁止や食物規程の遵守のような過度に禁欲的な生活に精を出す者たちが出てきたようです。彼らによって教会の教えは様々に捻じ曲げられ、混乱に陥る教会もありました。牧会書簡はそのような危機的状況の教会の指導者たちに使徒たちが伝えたイエス・キリストの復活と永遠の命と愛の教えに基づいて正統な教えを説くように伝えるのです。「4:12 あなたは、年が若いということで、だれからも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、行動、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい。わたしが行くときまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。」

今日の御言葉からは、私は現代社会にとっても近い物を感じます。今インターネットが発達してあらゆる情報にアクセスできる。しかし、その中で愚かな噂話、デマ、うその情報に振り回される私たちの現実がある。特に、コロナウイルスの出来事一つ取っても、何の根拠もないデマが広まって、自己中心的な買占めや差別や誹謗中傷が行われたりしている。「4:7 俗悪で愚にもつかない作り話は退けなさい。信心のために自分を鍛えなさい。」は全く今の私たちに当てはまるように思います。特に、何人かの方から「もうすぐ終末がやってくると言われたが本当ですか？」と尋ねられました。終末がいつ来るかは「その日、その時をただ神が知る」ですので、

分かりませんし、いつでも備えておかなければならないと思います。けれどもこういった社会的な混乱と人々の不安を黙示録の記述とむやみやたらと結び付けて、信徒獲得を目指す教会があることは嘆かわしいことだと思っています。

この数日の爆発的な感染の広がりを見ると、これほど科学や医療が発達した世の中においても、私たち人間にはどうやっても防ぎようのない事柄があることを改めて思い知らされています。人間には限界があるのです。だからこそ、私たちは神に希望を置くのです。「わたしたちが**労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。**」この世界のすべてを創造し、私たち一人一人を愛してくださる方입니다。この方が共にいてくださることを私たちは知っています。だから現実打ちめされることなく、奮闘することができる。今が最悪の状況でも諦めることなく立ち向かえるのです。イザヤ書の言葉です「30:15 まことに、イスラエルの聖なる方／わが主なる神は、こう言われた。『お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある』と」

最後に 2020 年から愛光保育園とは法人を分かれて歩むことになりました。しかし、法人を分かれたからと言って関係が途切れるわけでは決してありません。むしろこれまで法人が一緒だということに甘えて、牧師や一部の信徒に頼りきりであった保育園との関係を見直す良いきっかけだと思っています。その一つとして多度津教会と愛光保育園の共働キリスト教精神を作成しました。

「人間は神によって創造され、愛されている存在である。神はいつも私たちのそばにいて、一人一人に異なる賜物とかけがえのない命をお与えになる。私たちは互いに愛し合い、隣人と共に生きる神の国を目指し、祈り、働く。」

私たちは何のために教会活動をしているのでしょうか？皆さんは考えたことがあるでしょうか？毎週日曜日（休日）の一番のんびりした時間に集まり、讃美をし、献金もする、これは結構大変なことです。みんなで集ま

ると楽しい、讃美歌を歌いたい、聖書の言葉に心が癒される・・・個人個人にとって教会に集まるモチベーション（動機）はそれぞれでしょうが、そもそも教会として私たちが集まるのは一体なぜでしょうか？私は、その理由の一つだと思っています。神の国を実現するためです。イエスの最初の宣教の言葉です。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい（マルコ 1:15）」そう言ってイエスは神の国がどんなものなのかいろいろの仕方で示されました。大人・子ども、女・男、金持ち・貧乏人、いろんな違いを乗り越えて 5000 人で一緒に食事をする、歩けなかった人が躍り上がるようなこと、病人が癒されること、孤独だった人が共に歩む隣人を見出すこと、喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣くことです。私たちはイエスが示されたそんな神の国をこの地上に実現するように、召されて、共に働く共同体なのです。

私たちがどうしてそんな途方もない神の国を目指し、労苦し、奮闘できるのか？「わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。」それはすべての人を救われる神さまにこそ希望をもっているからです。「平和と自由、主はいつの日か与えてくださる、ああその日を信じてわれらは進もう（『勝利をのぞみ』4 節）」平和で平等な世界（神の国）を求めて歩んだキング牧師たちが歌った讃美歌です。希望が見えづらい世界にあって、希望を捨てず歩んでいきたいと願います。